

クロマツ黄化症はマツツメハダニによって発生する			
[要約] 正月飾り用クロマツで問題となる、葉全体にかすれた様な黄斑を生じる黄化症はマツツメハダニによって発生する。マツツメハダニは年4～5回世代を繰り返し、クロマツの葉の展開時から被害が認められる。			
茨城県農業総合センター鹿島地帯特産指導所	令和6年度	成果区分	技術情報

1. 背景・ねらい

特産枝物である正月飾り用クロマツ（以下、若松）は砂質土壌で密植栽培されるが、定植3年目に当たる収穫年に、葉が黄化する黄化症の発生による収量・品質低下が問題となっている。そこで、黄化症の被害軽減対策の確立に向けて、現地ほ場における黄化症の発生実態及びその原因を解明する。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 若松で問題となる、葉全体にかすれた様な黄斑を生じ、被害が進むと株全体の葉がくすんだ黄色になる黄化症は、マツツメハダニによって発生する（図1）。
- 2) マツツメハダニは3月から10月まで樹上での成幼虫の発生が認められ、年4～5回世代を繰り返す。本種は卵で越冬し、3～4月にかけて個体数が増加する。本種による黄化症の被害は、若松の商品として重要な葉が展開する5月中旬頃から認められる（図2）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 葉がかすれた様な黄斑を伴わない黄化症の場合は、排水不良が原因である可能性が高く、令和4年度主要成果「若松の葉色に基づいた収穫前適正追肥」（技術情報）を参照する。
- 2) クロマツ栽培で問題となる黄化症以外の被害のうち、コガネムシ類、葉枯病、葉ふるい病によるものは定植1年目の株で発生しやすい。まだら症や赤枯れ症は、黄化症と同様に収穫年に発生しやすいが、症状が異なるため判別できる。
- 3) 本成果を参考に、マツツメハダニに対する防除対策を検討する。なお、令和7年3月12日現在、クロマツのハダニ類には、石灰硫黄合剤（まつ・新梢発生前）、エトキサゾール水和剤（樹木類・発生初期）が使用できる。

4. 具体的データ



図1 かすれた黄斑を伴う黄化症(左図)とマツツメハダニ(右図)
バーは 1cm(左図)と 1mm(右図)

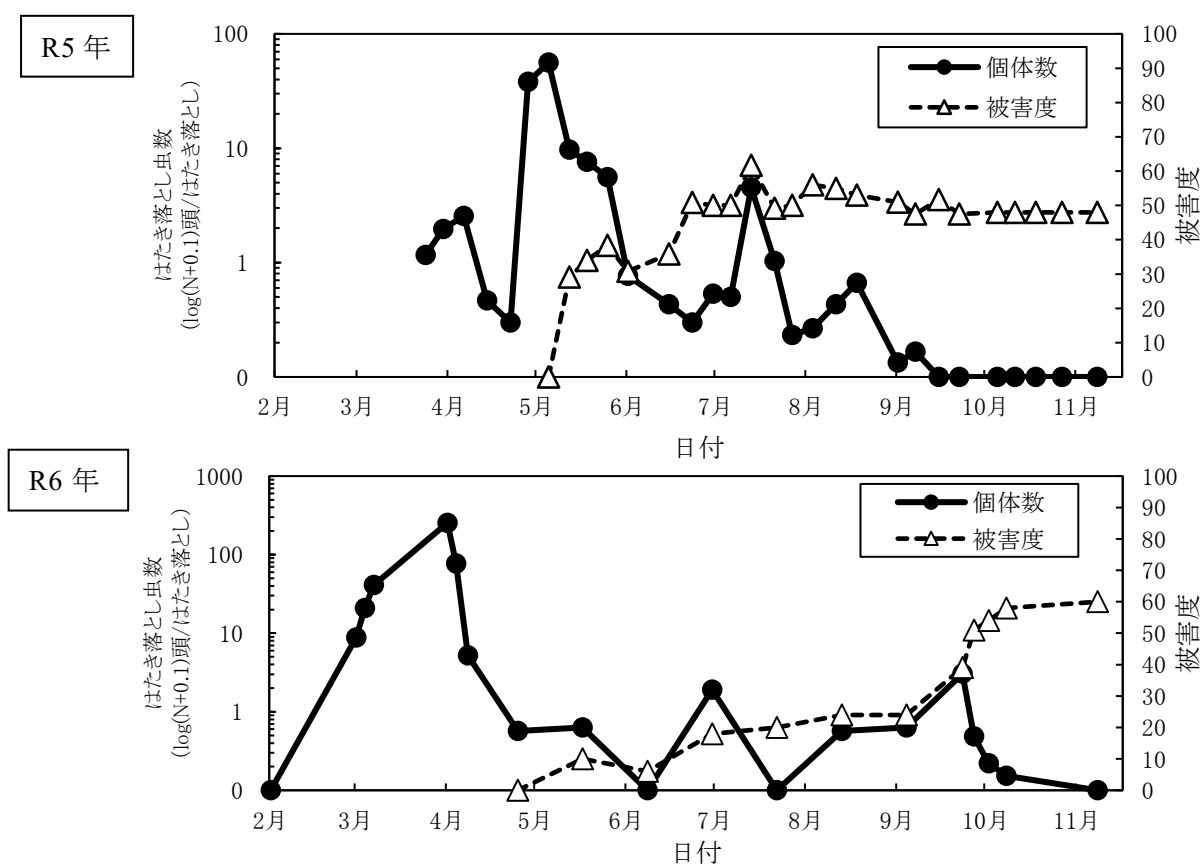


図2 所内殺虫剤無散布ほ場におけるマツツメハダニの個体数及びクロマツ被害の推移

注) R5～R6 の 2 か年、所内ほ場の定点あたり 15～30 株について、主茎 1 本を 5 回はたき落としを行い、落下したハダニの個体数を計測した。また、はたき落としを実施した株について、新葉を対象に葉の食害を程度別(0: 発生なし、1: 株の全葉の 10% 以内に食害が認められる、2: 同 10～30% に食害が認められる、3: 同 30～50% に食害が認められる、4: 同 50% 以上に食害が認められる)に調査し、 Σ (指数別被害株数 / (全被害株数 $\times$ 4)) $\times$ 100 から被害度を算出した。なお、被害度 25 以上で商品価値(単価)の低下が発生する。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

鹿南地域の特産枝物(若松、センリョウ)における新たな安定生産技術の確立・令和 4～令和 8 年度・鹿島地帯特産指導所